

## 私の対米経験：フルブライト

上田慶一 三重県教育文化会館元相談役

司会・星野：それでは時間がきましたので、2013年度臨時総会での講演会を開催します。最初の講演は上田さん、お願いします。

上田：失礼します。わたしがお話するような内容は、あまりないのですが、依頼されましたので。

お話をさせていただきます。まず初めに、ちょっとメダルを掛けさせていただきます。このメダルは頂きました。どこの大学か、アーカンソー大学。功績があるということで、このメダルを頂いております。アーカンソー・ステート・ユニバーシティです。大学はユニバーシティー・オブ何々というのがありますが、それ以外に何々ステート・ユニバーシティー。アーカンソー・ステート・ユニバーシティーというのは、アーカンソー州の東の方のジョーンズ・ボロ、ミシシッピ川に沿った都市の大学です。わたしがそこで教授をしていたのかと言われると、実はそうじゃないんです。わたしは時々遊びに行くぐらいなんですが、これをもらった理由はいろいろあるんです。これはまた後でお話します。これが金ですといいんですけど。ご覧になりますか。いいですか。

星野：せっかくだから回していただきます。

上田：たいしたもんじゃない。これはそれなりの記念になります。フルブライト氏とは、2度ばかり会っています。東京でお会いした。2度目はワシントンの法律事務所で会った。その時は車いすに乗っておられました。非常に優しい方で、わたしみたいな者の話を聞いていただきました。わたしは、フルブライト留学試験を通して、その翌年の1963年9月1日に渡米しました。ところがその前年の8月に知人から実は今ベトナムという所が、非常に陰悪な空気が出てきて、それで問題になっている。仏領インドシナの情勢が大変厳しくなってきた、フランス軍がダイエンビエンフ等の軍事重要都市から撤退し始めた。そこで米国は軍人たちを派遣して調査をしているというようなことです。ついては、そのうちのアメリカ人の1人が四日市に来て、講演するから出てこないかという誘いで、世界情勢の勉強になると思い、1人でのこのこと出かけました。講師の方はベトナムの地図を黒板に書いて、北ベトナムがこのように攻めてきて、今は大変なことになっているのでアメリカ政府は、ここに軍事顧問団を送って調査しているが、どうも危ないというようなことを、長々とお話しされました。その後でちょっと懇談会がありました。僕ともう1人フルブライトで行かれる方がいまして、その人と一緒に話を聞きました。それはそれで終わったんです。

数日後、その講師の方から電話がかかってきました。「ちょっと東京へ出てこないですか。米国での勉強に参考になることを話すから」とおっしゃるんです。ここからがちょっとミステリー風になるのでございます。東京へは新幹線がない頃です。東京オリンピックは、その翌年ですから、まだ新幹線がない。それで「東京を歩いて、どこへ行くんですか」と

言ったら、「渋谷です」「えっ、渋谷、渋谷のどこですか」「ガード下にてんぷら屋があるから人にあまり気付かれないうに会いたいんだ。そこで夕方から会いたい」。こう言うんです、時間を指定して。目つきのピシッと、いい顔をした人でした。

僕もアメリカへ行く身ですから、アメリカ大使館にはお世話になると思ひまして、のこのこと行ったんです。そこで話されたことです。「あなたも分かっているように、アメリカがベトナムで非常に窮地に陥っている。こういう問題について、政治的にいろんな見解があるけれども、あなたはどう思います。」「わたしは、そういうのは、分かりません。」ばかりかして言っていたんです。

そうしたら、アメリカへ行ったら、特にこういう面で政治的な動きが出てくる。反戦運動というのが盛んになってくる。だからそういうのをじっくりと見なさい。それから公民権運動というのがある。この公民権運動というのが、今年の8月号に、50周年ということで載りました。このルーサー・キング牧師が載りまして、デモンストレーションがあった。1963年8月28日に、25万人のワシントン大行進というのがありました。リンカーン・メモリアルからキャピタルヒルまでの、いわゆるモールという所です。その真ん中にリフレクティング・プールがありまして、ワシントンモニュメントがあります。それをずっと囲むようにして、25万人がここに集合した。そしてデモをした。これは何のデモかというと、人種差別撤廃です。公民権運動ですから、すべての所で平等に扱ってほしいという黒人たちの運動です。

それに賛同する白人たちもいっぱいいました。ここで、有名なジョーン・バエズとかそういうのもいまして、歌を歌ったりした。特に有名なのはワン・スピーチ、いわゆるワン・メンです。これは8月号のタイムですけども、ここに載っているように、50周年記念として出ております。俳優たちもいっぱいワシントンに集まって行進します。ここに黒人と彼らを雇っている地主が、共にジョージアの丘で食事ができるように、そういう世の中にしようという有名なスピーチをキング牧師がここで言われた。こういうようなことが後であるんですけども、わたしはまだ聞いていなかったんです。こういう公民権運動というのが非常に盛んな国です。おそらくあなたはそういうことを見るだろう。よく観察してください。よく勉強してください。こういうような励ましなのか、気を付けよというのか分からなかった。それで帰っていいということで、終わったんです。

そうしたら、わたしが出発する羽田に留学生たちがいっぱい集まったんです。ところがわたしのところに1人あのアメリカ人が来てくれました。そしてわたしの肩を抱いて、ここまで見送りに来た。だからしっかり勉強してきなさい。しっかり勉強する、考え方がいろいろあるからね、というふうに思ったんですが、そこでお礼を言って、アメリカへ飛んだわけです。ハワイ経由でサンフランシスコへ。こういう公民権運動というのが、どうも心の中にありました。それからベトナム問題というのが残りました。みんなで向こうに9月1日に到着し、それからワシントンへ行って、カーライル・ホテルという宿舎に泊まっているときに、道にたくさんバグジが落ちていると言うんです。

それは黒人と白人が手を結んだバッジです。ここにもあります。それが無数に落ちていく。何かがあった、それは知らなかった。そして教育局での研修があり、その時に公民権運動の問題についての話がありました。この問題には非常に根深いものがあるということで、武力闘争にならないように、平穏に解決していきたいというようなことを言っていました。

この話は総論として聞いておったんですが、ワシントンでの研修を終えて、わたしたちはテキサス大学で研修するためオースティンという首都にある、テキサス大学に行きました。そこに行って、まず宿舎を決めなければならないです。それでインターナショナル・オフィスが世話をしてくれるんですが、ちゃんと用意してあったところは、インターナショナル・エイカーズという、留学生のための宿舎です。2人1部屋です。テキサス大学へ行く学生だけが列車に乗って、2日間かけてセントルイス経由でやってまいりました。テキサスは初めてだし、もちろんアメリカへ来るのも初めてですから、どんな所だろうと胸をときめかせていました。映画で見たけれども、夜、汽車の窓からパッパ、パッパと、海を走っているようです。真っ暗で、地平線が水平線のように。ウワーッこれがテキサスかと思いました。そしてテキサスのオースティンの駅に着いたら、首都なのに小さい駅だなと思いました。迎えに来てくれていました。その時にルームメイトを決めなさいと言われて僕は黙って、誰でもいいと思ったら、1人のラテンアメリカから来た留学生が手を上げて、僕と一緒に住まないかと言われたんです。いいよと言って一緒に住みました。彼がエルネスト・ロンベータと言うんですが、この人は苦勞して、苦勞して、留学試験を通して、そして大学に行ったんです。わたしは、初めは何も分からないですから、一緒に勉強するという事になったんです。

アメリカへ行ったら、アメリカの大学院学生と一緒にあって、しっかりと勉強しよう。もう1つは車を持っているやつと一緒になろう。なぜなら生活するのに車がないと何もできないんです。ウォッシュテリアとか、知らない言葉がある。誰も外には洗濯物を干してないんです。洗濯物を外に干そうと思ったら、恥ずかしくて格好悪いんです。うっかり食堂の後ろの物置の所に干して置いたら、それを開けられて恥をかけたこともあった。ウォッシュテリアという、有料のところみんな持っていくんです。そして外に干さないんです、ドライヤーがあるから。それも知らなかった。今から50年前の話です。日本では洗濯機で洗っているぐらいです。そういうような生活に慣れるためには、あるいは生活を知るためには、やっぱり現地の人と住むのが一番いいと、僕はもう初めから思っていた。

次に皆さんはご存じかと思いますが、日本には駐日大使でアマコストという人がおみえになっていました。この人が後になって言われたんです。こういうふうにテーブル越しで話をしないで、テーブルの向こう側に行って、一緒に側になって話をしなさい。そういう気構えで勉強しなさい。僕らはアメリカというのは日本と対比して、向こう側で見ますが、向こうのアメリカと一緒にようになって、同じように問題を考えなさい。これを言われていたんです。わたしはアマコストさんに3回ぐらいお会いしました。後日、三重県にソ連

のゴルバチョフさんとアマコストさんがみえて、ディスカッションをされたんです。わたしはそれを聴講したんです。こういういろいろな人に出会って、いろいろなことを教えられました。できるだけ彼らの中へ入ろうというふうに思ったんですが、アジア人が現地の人の中に入るの、はじめは難しいです。ワシントンで物乞いの黒人にお金を出し渋ったらイエロージュウと言われましたから。何しろ有色人種に対して、どうも偏見を持っているという感じでした。特に共和党で、民主党が弱いテキサスですから、もうフルブライトといったって、フンと言うようなもので、どうも風当たりがちょっと違うという感じでした。

その中でフルブライト学生として、どのように生活していくか、彼ら土地の人と仲良くなるのにどうしたらいいか。まずテキサスということを知ることだと思いました。テキサスという名前はどういう意味か知っているか。分からない。友情という意味だ。だから非常に愛情があるんだ。他人に対して温かい気持ちで迎えるんだ。これがテキサスという意味だ。テキサスは独立した国でもあったんだ。だから独立心が強い。北部の者などとは全然違うんだ。独立していたんだ。かつての西部劇に出てくるいろいろな名前を言うんです。それを聞いてもわたしは、映画で見たようなことはあるというぐらいの話です。

もう 1 つは、その時に州の歌を覚えなければいけないと思ったんです。どこでも聞きます。テキサス、ああ、テキサスという歌があるんです。いい歌なんです。それを覚えること。それから大学の校歌を覚えること。校歌は所々でよく歌うんです。フットボールの大会の時でも何かあるときに歌うんです。留学生は、案外そんなことに無頓着なんです。これは覚えなければいけない。テキサスの州のモットーは何かというの調べていなければいけない。そしてできるだけ聞くことです。ところが、外国人にとって、仲良くなるというのは難しいです。わたしが、この学校の校歌というのはどんなものかと聞いたら、**The eyes of Texas** という、テキサスの目という意味なんです。**The eyes of Texas are upon you** という歌です。メロディーを聞いたことがあると言ったら、列車の歌です。「線路は続くよ、どこまでも」のメロディーを使っている。**The eyes of Texas are upon you all the live long days. The eyes of Texas are upon you. You cannot get away** 逃げられないんです。**Do not think you can escape them** という歌で、何か怖い歌なんです。これが至るところ集会で歌うんです。それを覚えました。そういうようなことをして授業を、受けることになってまいりました。

身体検査というのもあります。厳しいです。身体検査で 10 名なら 10 名集まると、男の者は、みんなで行ったんです。そしたらびっくり仰天、全裸です。手ぬぐいも何もないです。その場で脱げ。徴兵検査みたいなものです。そして全部調べられます。エエーッというようなものでした。テキサスはそうでした。そういう日本ではできない体験をしながら、何とかアメリカの学生の中に入っていきたい、そしていろいろなことを学びたいというふうに思いました。エルネストというエクアドルから来た学生と入っていたんですが、スペイン語が時々出てくるし、バスルームとトイレはとなりとの共同。となりはドイツの学生

がいるんです。ワイワイ、ワイワイと騒ぐ、どうも落ち着かないと思った。それで1人でずっと歩いていてドラッグストアにちょっと入ったときに、学生たちがコーヒーなんかを飲んでいる。僕が入っていったら、1人の学生が、「ああ、あなたは日本人か」と言いました。これがまた因縁です。この男はジェフリー・Sと自己紹介したので「そうだよ」と言ったら、「そうか、何だ。留学生として来たんだ。そうか、僕は板付エアースペースにいた。自分の父親は空軍将校だった。そこで子どもの頃に育った。だから日本は懐かしい。いい国だった。」と言ったんです。

もう1人の男はフィリップ・Rとあって、これは黙って聞いている。これは大学院の学生なんです。「実は僕は部屋を探しているんだけど、いい所はないか」と言ったんです。「アメリカ人と住めるような所はないか。」「そうか、僕たちはいまは一緒に住んでいるんだけど、僕は出ていくんだ。だから僕の後へ来たらどうか」と言われたんです。それならと言うんで部屋を見に行ったら、まああの部屋なんです。ちょっと半地下になっていて、半分からは地上に出ている。まあ、これでもいいや、安いと思ひまして、そこに決めました。

ジェフリー・Sは別の所に行きました。後に彼は有名になるんです。その後ニューヨークへ出て、ジョン・レノンと知り合い彼といろいろ関わるようになります。ジョン・レノンが、ニューヨークの彼のアパートに訪ねてきたということをメールで送ってくるんです。そしてオノ・ヨーコも来たらしいです。ニューヨークに出る前は、学生たちで公民権運動が非常に盛んでした。彼は、僕をファースト・ネームで呼びます。「ケイイチ、学校の勉強も大事だが、このテキサスは非常に保守的だから今、町を歩いてみなさい。レストランに札がいくつか掛かっている。それを何と解釈する。」そう言われました。ずっと歩きました。この店は、オーナーが入場拒否をすることができる店です。そういうのが張ってあるわけです。それから駅へ行きました。ウェイティング・ルームへ行くと、カラー、ホワイトと分けてあります。僕はカラーの方に行きましたら、黒人がギョッと睨んで出ていきました。パブリック・トイレに行きますと、カラー、ホワイトと書いてあります。こういうのを見てきて、ああ、そうだなと思ったんですが、ジェフリーは、「見てきたら、僕らはこれをなくす運動をしたいと思っているんだ」こう言うんです。彼は1週間に1回は、大学の構内で演説をするんです。ダンプというのをやるんです。そういうのを見て、おれがあんなやつと一緒にいたら、疑われるんじゃないかという気がしたんです。個人的には親しくしていましたが、できるだけそういう場には行かないようにしていました。

ところがある時です。シット・イン・プロテスト、座り込みです。「これを僕らは計画している。けいイチ、おまえもちょっと関心があれば、見てみるといい。だけど絶対に僕らの近くに来てはいけないよ。あなたは外国人だから逮捕される。」自分の部屋にいるフィリップも彼と同様なんです。一緒に住んでいる以上、それを見ようということになった。その前にどうするか。大学の寮は、黒人は黒人だけで、白人とは全部隔離しているんです。まず夜に黒人の寮に行くんです。行って、説得して何人かを集めるんです。日曜の昼、教会へ行った帰りの家族が寄るピカデリイというファンシー・レストランが、町の中心にあ

るんです。そこで座り込みをするから、30人ぐらいを集めよという指示をするんです。その幹部は、僕の部屋へ来てちょっと打ち合わせをしている。いろんなことを言っているその中で僕は彼らの話を聞いていました

いよいよ日曜日にそこへ行くことになった。わたしは1人で事前に入って、レストランでいろいろなものを自分で取り、お金を払ってテーブルに座ります。彼らジェフリーやフィリップその他の白人たちも、全部バラバラに入ってバラバラに座ります。1人が廊下のガラス越しに外を見ていると、向こうのブロックの角に白人や黒人たちが、30人ぐらい顔を出してずっと待っていて合図をすると彼らが行動開始するんです。やがて時間となり、合図をする。入ってくる。ドアを開けて入ってくると、大きな体の用心棒が来る。棒でもって押し出そうとする。大騒ぎになって、みんな教会帰りの家族の人が総立ちになって、ウワーッと騒ぐ。僕はその中で黙って事態を見ていました。それから店の人が警察を呼ぶんです。しかし警察がなかなか来ない。30分ぐらいしてから、ウーウーとサイレンが聞こえると、みんながバーッと逃げる。こういうシット・イン・プロテストというのをじかに見まして、ああいうのなんだと思いました。これがずうっと続きました。こういうような経験やら、大学の勉強をしながら、わたしは、もっと、もっと彼らの学生生活の中へ入っていきたくて思ったんです。

その時にそれと正反対の、ほんとに昔のテキサス魂をもった学生と知り合いになった。たまたまインターナショナル・オフィスが、留学生を集めてパーティーをしてくれたんです。その時にアメリカの白人の学生が寄ってきて、僕と話をしたんです。1回わたしの家に来なさいよ。今度感謝祭の時にいらっしゃい。彼の家に泊まりがけで行ったことがあるんですが、彼の家は名家で大きな邸宅が、テキサス州の文化財になっているんです。しかも大きな湖も持っており道路標識に彼の家の名をつけたその名がでてくるんです。まるで映画ジャイアンツに出てくる邸宅のようです。大きな別荘や広い草原そして土地の名家ですから友人がいっぱいいます。NASAの人やら牧場主やら。なんか学生運動とかかけ離れてしまいそうです、彼らにはあまりそんな話しません。たまに別荘でパーティーするとき黒人の女の人を招待していました。

ところで、その長男が僕のあの仲良しになりました。現在も家族付き合いをしています。その彼が合唱団に招いたのです。そうしたら、オーディションを受けたらどうだと言うんです。1900何年に創立した由緒ある男声合唱団です。国内はもちろん外国へも公演旅行に行くんです。おまえもこの一員に入れ。よし、やってやるぞという感じで、オーディションを受けたんです。そしたら合格しちゃったんですよ。声域はバリトンです。そしたらこれぐらいの楽譜をドサッと渡されまして、40曲ぐらい覚えろ。授業も勉強もしなければならぬ、アサインメントもあり、いろいろする、そしてリハーサルは週に2回です。指揮者はJim Woodle。アナポリスから来ていました。それにみんな白人しかいないんです。男声合唱団の写真を撮りました。これが僕です。その中に一人のスペイン人がいました。ホセ・コロといいます。これで練習をし、昼は勉強し、夜は図書館へ行っても勉強しまし

た。僕のルームメイトのフィリップ・ラッセルは、夜はあまり帰ってこないんです。なぜか。図書館にこもりきりで論文を書いています。彼は学部の時に優秀学生に選ばれているんです。だから僕は良かったんです。良かったんですけど、ちょっと変人で、勉強ばかりです。片一方の友人は、もうアウトドア的な人間で、僕を引っ張り出すんです。それで僕が合唱団に行くと、これは保守的な者ばかりです。僕は三つ又でみんなと仲良くする。これは自分の性格が分裂状態になったりした。だけどみんなと仲良くした。

ところが、いよいよ合唱団が、ヒューストンの大ミュージックホールで公演会をする。3列の場合、僕は一番背が低くて、一番前の真ん中です。ここで公演することになったんです。知人に対する招待券というのが 5 枚ぐらい配られました。ですから僕は、よくホームステイで泊めていただいた所に、それを送って来ていただいたんです。ところが大きなミュージックホールで、ライトが僕の顔にバーッと当たってしまして、全然見えない。そこへ持ってきてコンダクターがいて、僕の顔ばかり見るように見えるんです。

歌詞を忘れてしまって、口をアーッと、もうこれは手に汗が出るぐらいの経験です。まあ、皆さんやってみなさい。外国で外国人のお客に対してワーッとやるのは大変ですよ。これもやってみました。みんなでチャーターしたバスでダーッと回るんです。公演するたびに夜は徹夜でパーティーをするんです。これは楽しかった。

それで今度は LP レコードを作るということになった。LP レコードの顔写真も名前も入る。僕は作ったやつを 4~5 枚買ったんです。日本に帰ってきて、たまたまライシャワーさんが大使の時に、赤坂の大使館に行ってプレゼントしたんです。パシフィック・ブリッジという、アメリカ大使館の英語で出している広報誌があるんです。それに写真入りで載りました。わたしはアメリカ大使館の広報誌にも載りましたし、ボイス・オブ・アメリカでも放送されたんです。わたしは目を付けられたようで、ワシントンの国務省に呼ばれました。

その前にケネディが暗殺されたんです。1963 年の 11 月です。その時わたしはちょうど授業が午前中で終わって、ランチタイムにカフェテリアのチャック・ワゴンというレストランで、オックスフォードから帰ってきた早稲田大学の日本人の先生と一緒に、食事をしていました。チャック・ワゴンというのは食料を積んだ幌馬車隊のことです。テキサスらしいでしょう。その時に、ケネディが今日の 4 時頃にオースティンの知事公舎に来る。そして副大統領のジョンソンとコナリー知事も一緒にダラスからやってきて、選挙演説をするということでした。わたしたちは期待して待っていましたら、ダラスで撃たれた、病院に入ったという臨時ニュースがあって、みんなびっくりしたんです。それで死ぬことまでは考えない、けがをしたんだろう、だけど大変だということだったんです。

ところが 40 分ぐらいしたら、死んだということで、すぐに講義はなしで、半旗にしました。そうしてみんな家に帰れ、犯人が分からない、引き続いてどこで何が起きるか分からない、警戒態勢を取るから、町は全部戸を閉めて、家の中に入れということになった。自分は部屋に入って、ルームメイトはまだ帰ってこないから、1 人でラジオを聞いていたんで

す。そしたらコナリー知事も重症だと言うんです。それが金曜日だったと思います。池田勇人さんが首相で、フランスはドゴールさんが首相だったんです。そういうことがあって、いよいよ月曜日に国葬ということで、それをテレビで見ました。池田さんもみんなも来たのをずっと見ていたんです。その時にオースティンの町で、どういうことをするかというのを見ていたら、みんなそれぞれが半旗を掲げて、何かをやっているんです。それをずっと歩いて見学して、家に帰ってきました。それから 2 日ぐらいは授業がなかったんです。そして今度わたしたち男声合唱団は、慰安に行くということで、コナリー知事の公舎へ行って、慰めの歌を歌ったんです。そういうことも経験しました。勉強以外にもあれやこれやとやりました。

1964 年の冬休みには、インターナショナル・オフィスが、留学生のために旅行を計画した。あなたたちは帰るべき家がない。学生たちはみんな帰っていて空になった。もしお金を出して行きたかったら、あなたたちも参加してください。僕は参加しました。

大旅行なんです。オースティンから西へずっと行って、ニューメキシコ州へ渡って、そこに世界遺産の大きな鍾乳洞があるんです。そこを見てそれからアルバカーキという所へ行って、そこで泊まりました。それからグランドキャニオンで 2 日泊まって、ヨセミテの国立公園へ行きました。それからサンフランシスコへ出て、モントレイへ行って、ロスアンゼルス、アリゾナのフェニックス、エル・パソ、そしてリオ・グランデ川を渡って、メキシコのアレスへ行きました。ラスベガスへも行って、クリスマスをしました。それから学校へ帰ってくる。待っているのは試験でした。もう本を抱えていました。これはほんとにいい旅行でした。各国の学生たちとバスの中で歌を歌って、わたしは「木曾の御嶽山」を歌いましたが、みんなはキョトンとしていました。メキシコ人なんか、いい歌を歌っていました。「わたしは英語の歌じゃなく、日本語の歌を歌う」と言って。そんな「木曾の御嶽山」では張り合えなかったです。そういう旅行を楽しんで、いい思い出になりました。

そういう人たちと学校へ行って、授業は別れましたが、イングリッシュ・エジュケーション・アズ・フォーリン・ランゲージでしたから、違う州へ行って、教育実習生ということだったんです。教育実習でインディアナへ行くと言う。僕はうれしかったです。日本でインディアナ州の映画を見たことがあるんで、ここの州歌がものすごく好きだったんです。インディアナポリスにはレース場があります。鈴鹿サーキット、今日もいっぱいでした。そこにホームステイをして、高校生や中学で教えたんです。その時に、ロータリークラブで公演せよ、それからテレビに出よということがあって、仕方なしにやったんです。そのインディアナポリスの地域と今度フォート・ウエインという第 2 の都市、そこへも行きました。そこへ行ったときは、インディアナ大学の音楽の教授をされて、リタイアしていた家にホームステイしました。だから夜になるとピアノを弾いて、歌わされるんです。おまえは歌がうまいから、おれの友達に所へ行って歌え、こっちに行って歌えと、いろいろありました。それも体験だと思っていました。

その時に国務省から呼ばれました。「実はボイス・オブ・アメリカ VOA 放送で放送して

ほしい」と言われた。「何をですか」「あなたはテキサスにいたでしょう。ケネディの暗殺事件に遭ったでしょう。それを日本語放送でアメリカに放送する」。こういうことです。それでワシントンの国務省、ステート・オブ・マーブルと言いまして、何階かに、高層ビルで厚いガラスがある、その前にアメリカ人が、こんなマイクの前で英語でしゃべっているんです。それが終わると、「This if from Washington、これから日本語放送になります」と、日本人のアナウンサーが言った。「今日はフルブライトで来た、テキサス大学で勉強しておられる、上田慶一さんをご紹介します」と言って。「皆さんこんにちわか、こんばんは」と、日本語でわたしはこういうものですよと言いながら、ケネディ大統領が暗殺されました、わたしたちは一同、非常に悲しんでいますというようなことを含めて 30 分話した。それが東京のアメリカ大使館でみんな録音されています。わたしの家に送られてきた、そういう経験もしました。またテキサスへ戻って、レポートも仕上げなければならない、いろいろな勉強を続けました。

僕と一緒に住んでいるフィリップではなく、出ていったジェフリー・シエロの話をします。実は、彼はモスクワ大学に留学していた。モスクワ大学から帰ってきて、パサデナの方にいました。そしてテキサス大学の学生として勉強していた。

彼と向き合って話しすると、音楽は非常に好き。だけど、この社会を変えないといかん、そういう話ばかりしていたんです。「ウォール・ペインティング・パーティーをやるから来い」と言う。いろいろ壁に書くんです。平気で壁に書くんです。そういうパーティーをやりました。僕は何も書くものがない。日本語で書けというから、古池や、かわず飛び込む水の音、これしか書けない。カエルがポトン。「これは何だ」と言うから、「これは意味深長で非常に歴史の古い、日本では一番有名な詩なんだ。」「おお、これは何だ。」「カエルだ、ポトン、音がするでしょう。」「ああ、それは禅だな」、こう言うんです。「そうだ、そうだ」、そんなあほなこと、ばかなことを言った。しかし、後に彼はニューヨークへ出て、ニューヨークにいる間にジョン・レノンと知り合った。ジョン・レノンが訪ねてきた。そして音楽を作る。イマジンに手を貸したというのは、インターネットのホームページに載っています。ジョン・レノンが暗殺されました。彼は何とかパンサーというもっと過激な黒人のあれです。それをよく聞きに行っていたんです。

彼は大学を卒業してからどうしたか。オリバー・ストーンという映画監督です。「7 月 4 日に生まれて (Born on the Fourth of July)」トム・クルーズ主演。この映画を見た方がおられると思います。反戦映画です。ベトナム戦争に行ったトム・クルーズが、負傷して帰ってきた。みんなから、ベトナム戦争に行った英雄として見られずに、逆にあんな所へ行ってというように見られる、そして反戦家になっていくという悲劇の映画なんです。アカデミー賞を取っているんです。それにジェフリーが助手としてやっているんです。最後のクレジットに彼の名前があります。変名にしていますが、ジェフリーだけジェフと出ます。ジェフ・ナイトバーグです。実は僕に、「ケイイチ、おまえに 1 回会いたい、おれは名前をジェフ・ナイトバーグに変えて、映画のクレジットに必ず出てくるから見ろ」という

メールが、ジェフリー・シエロからありました。彼は映画産業に変わって、ニューヨークとハリウッドとルイジアナのシュリブポートと、3つのオフィスを持って、女優、俳優を養成する仕事をして大成功しています。

僕はテキサスにときどき行っていたんです。アーカンソーもときどき行っています。アーカンソーに行く1つは、僕の友人がアーカンソー大学の教授をしていることです。この教授になったのが、僕の前ルームメイトです。スペイン語をしゃべるから、もう僕は替わると言ったエルネストです。彼はアーカンソー大学の教授になったのです。そこで彼は大牧場を持っているものですから、時々遊びに行くのです。彼と出会うのには40年かかりました。僕を探し出して、日本人の留学生があるとケイイチ上田というのを知らないか、日本のケイイチ上田を知らないか。誰も知らないですよ、そんなことを。たまたま三重県から行った高校の先生が、夏休みの何かセミナーでテキサス大学へ行ったとき、ケイイチ上田というのを知らないかと言った。うんと思っていて、あっ、聞いたことがあるな、あっ、あの人だということで、僕のことが分かった。そして知っている、知っている。テキサス大学の留学生で聞いたのは、エルネストの弟です。彼が、「あした会いましょう、そこで教えます」と言って、その晩に、日本のお父さんが危篤だという電報が入った。すぐに日本へ帰られたので、会えなかった。40年かかって、わたしと彼と再会しました。そういういろいろな所での出会いと別れがありました。

日本へ帰ってからライシャワーさんとハル夫人にパーティーに招かれて留学体験の一端を報告しました。

ところが今度は、東京の赤坂のアメリカ大使館に用があつて、地下鉄に乗っていたときにライシャワー大使が刺されたらしいということを目にしました。一緒だったアメリカの大使館員にそのことを告げると、「えっ」と言って、真っ青な顔になり、大使館に飛んで行きました。僕はそこから引き返しました。ライシャワーさんが刺されるというような、本当に血なまぐさい事件があちこちにありました。そういうことも踏まえたわたしの留学体験の一端です

このメダルは、友情のメダルとしてもらったものです。